

八 キミよ、日本を守れ

「国を守る」ことは、今日を生き、明日に備える根幹です。

近隣の諸国、特に、中国とは、現在の政治体制、採っている「主義・主張」に隔たりがあるものの、我が国の歴史上、極めて深い関係を継続してきました。

現在の中国は、昭和二十四年（一九四九年）に中国共産党によって統一され、その歴史は六十二年間にしか過ぎません。北朝鮮においても然りです。

一党独裁、あるいは、個人独裁国家が、今後どのような国内状況を生み出すか、予測は極めて困難です。しかし、米国とともに「自由」を謳歌おうかしながら、民主的な社会を構築している我が国は、この両国との関係において、単に敵視せず、ただし、油断せず、関係改善に努めながらも、「節度」ある交流が求められるのです。

特に、中国は、十三億強の人口を抱え、多民族国家としての統治が難しい国柄です。国内の経済格差は、年々大きくなる一方、広大な国土を住み易くする社会基盤は、今もって脆弱せうじやくな状態だと云われ、少数民族差別の不満も一部伝えられる等、国内に内乱の要因を抱えているのが実情です。

歴史的視点からすれば、二、〇〇〇有余年の交流を保つ中国との関係を優先すべきでしょうが、関係各章で論述したとおり、日中間には、相容れ難い問題が多数混在しています。

先の大戦で敗れた我が国は、経済を優先して、その大国とはなったものの、防衛力を最小限に抑制してきたため、中国との比較において、防衛力が不足した状態になっています。

人間が戦争を引き起こし、人間自らが、戦争をこの地上から廃絶できない限り、日本国民が生き延びる術すべのひとつとして、最小限の防衛力（武力）を保持することは、当然なのです。

更に、日本独力では、脅威対象国が保有している核戦力等の強大な武力に對抗できないが故に、「自由主義圏」に共存する米国との軍事同盟を、強化す

ることが、同時に求められるのです。

米国の歴史は、我が国の歴史に比べれば、高々二百有余年に過ぎず、その政策は、世界最強の軍事力を背景に、時に、独善的に突つ走ることがあります。昭和四十七年（一九七二年）、当時の米国大統領ニクソンが、突如、我が国の頭越しに、中国との国交を樹立した、俗に「ニクソンショック」と呼称される行動はその典型です。その行動の裏には、「張子の虎」と評しながらも、毛沢東率いる「中国共産党政権」が核兵器開発に成功した事実がありました。

新たな核兵器保有国となった中国に対する、この時の米国の対応を教訓とした北朝鮮が、「核兵器の開発・保有」こそが、自国に対する米国の態度を一変させる「鍵」になると確信し、「核開発」に執着し続けているのは明白です。こうした、米国の独断的な行動の現実を認識した上で、日米同盟をより強固に、より深化させることが、我が国を守る最善策なのです。

我が国を守るには、先に「集団的自衛権の行使」と「非核二原則」で論述したように、国民のこうした防衛力確保の決意と日米同盟を強化する弛まざる努力とが、不可欠です。

他方、世界で唯一の被爆国として、広島・長崎から「核廃絶」に向けたメッセージを発信し続けることも大切です。人類の愚かな「核戦争」を抑止する、小さな抵抗として貴重なのです。

我が国は、更に、前項「日本人としての誇り」で記述したとおり、「世界の平和」と「国民の平安」とを常に祈っておられる「天皇陛下」を象徴に戴く、世界に類を見ない国家です。

「平和」の大切さを、折々に、陛下から世界に向けて発信して戴きながら、「国を守る」備えだけは怠らない、一見「二律背反」と受け取られそうであっても、そうした「防衛政策」を継続すべきです。

米国が独立して間もない頃、「ガラガラ蛇」を描いた国旗を使用した州があったと伝えられます。

この旗は、建国二百周年記念の際に、米国軍艦の艦首に掲げられました。旗には、独立直後の十三州を示す紅白の帯と十三個の星、下部にガラガ蛇が描かれ、

「 Don't tread on me ! (踏みつけるな) 」

と、添え書きしてありました。

踏みつける（攻撃する）ならば、必ず反撃して致命傷を与えてやるとの、米国民の「防衛意識」が色濃く打ち出されていたのです。

「専守防衛」に徹する我が国にとって、小国と雖も十三州時代の米国民が堅持していた「国を守る」との硬い決意を、同じように、国民全体で保持しなければ、独立を維持することは困難です。

さて、貴方達（キミ達）のような若い方々に、「国を守る」ことが如何に重要であるかを理解して貰うため、本書を著しました。

これからの日本の「国防」は、若い「キミ達」に期待致します。

明治維新以来、我が国が辿った戦争の教訓を真摯に受け止め、現在の我が国を取り巻く軍事情勢を正しく把握して、「恐れず」「・」「・」「阿らず」、民族の誇りを失うことなく、毅然として「日本」を守り通して戴きたい。

戦わずして「勝利」を収める方策を求めながらも、危急存亡に臨んでは逃げることなく、一人でも多くの国民の生命を救うために戦って下さい。

勝利なき戦いは、「無謀」です。

敗戦の憂き目だけは、避けなければなりません。

「一國平和主義」が非常識となったように、今後、混迷と複雑化を増す世界では、「独りよがりの自主防衛」も困難だと悟るべきです。

国連の機能に限界がある限り、同盟国との集団的自衛権を有効に発揮することにより、「日本に対する戦争を抑止する」のが、最善の策なのです。

最後に、半世紀以上を経ても色褪いろあせない、防衛大学校初代校長の榎智雄先生が昭和三十三年（一九五八年）三月十七日の卒業式で述べられた一節を紹介して、筆を置くことにします。

「人は幸福に慣れる時、ややもせば心緩み、励むことを忘れ、また怠るものであります。しかし、ひとたび目を世界の現状に向けますと、このような幸福は、他の多くの民族が常に受けているものでもなく、また無為と安易のうちに獲得するものでもなく、あるいは激しい努力なしには維持することもできないことに気づくであります。一国を成せども異民族相争い、一民族にしていくつかの国家に分断され、あるいは民族が自由に選ぶ政府の下の生活を拒まれて、屈従に服することは、余りにも多くその例を見るとあります。幸いわが民族は、独立を確保し、平和を維持し国民みずからの法秩序を擁立して、生活を営んでいるものであります。これを幸福であり、誇りであるといわずして、何を幸福であり、誇りであるといひ得ましよう。しかし、独立と平和を確立し、国民みずからの生活を擁護することの、いかにむずかしきかは世界の現状が示しており、国民の熱意と努力のみがこれを可能ならしめますことも一つのはげしい現実として、日毎にこれを眺めているのであります。ここに国民の防衛意欲が発し、われわれの防衛の任務が生まれ、その任務と、尊さがあるのであります。民主主義の下の防衛とは、このようなものではないかと考えております。」

（榎智雄著「防衛の務め」（甲陽書房）一一八頁）

キミよ、日本を守れ。

終読を感謝します、合掌。

あとがき

今年（二〇一一年）三月十一日、東日本大震災が勃発しました。

マグニチュード「9超」を記録した大地震は、想定を超える大津波を発生させ、この為、全ての電源を喪失した福島第一原子力発電所の原子炉数基が「メルtdown」を起こしました。

「国難」と称される、この震災から五ヶ月近くが過ぎても、放射能漏れの収束は先が見えず、また、被災地の復興そのものも、遅々として進展しない状態が続いています。

放射能と云う「見えない敵」との戦いは、被災地を「平時」から一気に「有事」の状態に陥れたに等しく、「国民の生命財産を守る」との視点で、「国家の果たす役割」が、強く問われる事態となりました。

被災地に投入された十万人を超える自衛隊員は、戦後の民主主義の中で育まれた真摯な姿勢で「被災民の想い」を「自らの心」として、昼夜を厭わず復興に尽力しています。こうした「国民の自衛隊」としての姿は、報道を通して、国民が改めて、広く知るところとなりました。

「自衛隊」が、国防を軽視する政治家が愚弄した「暴力装置」では決してないことを、内外に示したのです。

また、震災発生時、各地の被災地で住民を「避難」させる為に命を賭して職務を全うした警察官・消防団員・自治体職員の悲報が、「公」を優先させる日本人の「国民性」を遺憾なく発揮した事実として、聞く者の涙を誘いました。

こうした現場での努力とは裏腹に、「国を守る」に必須の「国家観」に乏しい政府要人が自己保身を図る態度は、復興対処の時間を空費させるだけで、我が国にとって、不幸の極みであり、残念でなりません。

ともあれ、未曾有の大震災が、「国を守る」意義について、政府をはじめ国民全体に、改めて、問い直したとも云えます。

本書は、表題が示すとおり、「国防」を扱い、その根底には、「戦争と平和」に対する「理想と現実とのギャップ」をどのように捉えるのか、との「命題」が脈動しています。

「戦争と平和」のテーマは、ロシアの文豪トルストイの小説を紐解くまでもなく、人間にとって、深遠で解明し難く、あたかも、底深い「井戸」を覗くに等しいものです。

人は何故、争うのか。
国家は何故、戦争するのか。

個としての人間は、自らの生命いのちを大切にさだめする運命を負い、また、互いに助け合う本能を持つているにも拘らず、地球上から「戦争」が無くならない現実を、「国家と政治体制」の歴史的変遷に着目して分析しました。理想としての「平和」、現実としての「戦争」、この狭間で「戦争を抑止」し続ける方策を検討しました。

人間の「性」さがとも云うべき、「戦争」を繰り返す歴史の中で、「日本を守る」為にはどうするのか。

近隣に、顕在する脅威としての中・朝両国を抱える日本が、「戦争を抑止」して、少なくとも、「平和を享受」あていよめし続けるにはどうするか。

この小論が、若い貴方達（キミ達）にとって、「日本を守る」意義を考察する上で、少しばかり役立つならば、望外の喜びです。

昨年（平成二十二年）二月に書き上げた本書の内容にご理解を賜り、公表する機会を与えて下さったNPO法人「チャンネルNippon」の夏川和也理事長（元統幕議長）はじめ、編集の労を頂戴した山田道雄編集長（元海自呉総監）、山村洋行事務局長（元海自第一輸送隊司令）に深甚なる謝意を表します。また、ネット配信に直接携わって戴いた「チャンネルNippon」製作担当の坂本広志氏にも併せて感謝致します。

平成二十三年 八月 吉日

川越にて 佐藤常寛